
受験戦争

西内京介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

受験戦争

【Nコード】

N8691Z

【作者名】

西内京介

【あらすじ】

都内屈指の新学校で、受験を控えた三年生が自殺した。警察は受験のプレッシャーによる自殺と断定し捜査は打ち切られようとしたが、疑問を抱いた刑事館林は、ちょうど教育実習で訪れていた瀬郷洋輔に捜査協力の依頼をする。自殺した生徒は、成績も学年トップで、このままいけばどの大学にも入学できるはずだった。それなのにこの時期での自殺は、正直解せないというのだった。進めていくうちに、捜査線上に浮かび上がってきた二人の容疑者。二人とも成績同率二位を誇る実力者だった……。

次々と浮かび上がる、それぞれの思惑。果たして自殺か、他殺か。全てのピースがそろった時、驚愕の真実が明らかになる。

序章（前書き）

どうも。かなりしばらくぶりの投稿になります。西内です。

この小説は、自分の中でもまあまあ納得のいく作品に仕上げるこ
とができた、と思います。三人称で長編を書き上げられたことで若
干テンションがあがっているからかもしれませんが。

皆様に最後まで読んでいただければ、これほどの幸いはありません。
ん。

序章

青年は目を閉じ、自分の生命を確かめるように、ゆっくりと息を吐いた。両手を広げ、風を全身で受け止めようとしている。

気持ちいい。

口には出さず胸中で呟いた後に、青年は再び目を開け眼前に広がる光景を、まるで無邪気な子供のような気持ちで見下ろしていた。

この町は、なんて綺麗なのだろう。

青年は思ったことを口には出さず、胸の内で呟いた。口にしたところで、自分の気持ちを分かち合う人なんてこの場にはいないのだからという、諦めにも似た思いがあったからだった。

一瞬、強い風が吹きつけ青年は危うく落ちそうになったが、なんとかフェンスの網を掴み、堪えた。

風なんかには殺されてたまるか、どうせ死ぬなら自分で。

その決意は固かった。揺らぐことなく、遺書を書き、屋上のフェンスを乗り越え、ようやくここまでやってこられたのだ。風のせいで、生涯を終えることがあってはならない。

しかし、後一步。後一步を踏み出すことが出来なかった。

もう少しなのに。

悔しさと、自分の情けなさに涙を堪えきることができなかった。

まさか、後悔しているのか。

心の底から涙を流している自分に気づき、自問した。残念ながら、答えを出すことは出来なかった。

もう十分じゃないか。

その時、学ランのポケットに入れてあった携帯が震えた。誰からか、着信が入ったのだ。

自殺する前に人と話すのは、あまり気が進まなかった。人と話すことにより、死への躊躇いが生じてしまう可能性があったからだっ

た。

どうすればいいか、そう迷っていると携帯が鳴り止んだ。慌ててポケットに手をつ込み、携帯を取り出した。画面を開いて、かけてきた人物を確認する。

それは、この学園で唯一の友達からの着信だった。

数秒迷った挙句に、青年は自ら友達の携帯に掛け直した。

「もしもし……」

会話は数分続き、青年は携帯を切って夕空を仰いだ。

あいつは何を考えているんだか。

口元に微笑を浮かべながら胸中でそう呟くと、フェンスに背中を預けて携帯をポケットにしまった。

本心から言うと、友達からの着信は嬉しかった。けど、やはり複雑な心境であった。

揺らぐ決意　ここまで来たのに、また引き下がることになってしまふのか。

顔に、いよいよ突き刺さるような痛みを伴う風が吹いた頃、後ろのほうでドアノブが回る音がして、反射的に青年は振り向いた。

ドアは、まるでスローモーションのようにゆっくりと開いていく。青年はそれをじれったく思い、齒軋りをした。

早く来いよ。

やがて、ドアは完全に開かれた。

第一章

不意に、今まで聞いたことのないような、不快感極まりない音が耳に入ってきた。

瀬郷洋輔は読んでいた本を閉じて、ゆっくりと音のした方向へ顔を向けた。

音が聞こえてきたのは、ここからそう離れていないな。
そう思い、席を立て洋輔は図書室を出た。

洋輔は某有名大学に通う二年生で、教育学部に所属している。専攻は歴史。教育実習生として、洋輔は今日、都内でも屈指の進学校、宝徳学園へとやってきた。

今日は初めてということあって、教室の後ろで世界史の授業を見学しているだけだったが、早くも洋輔の心は折れかけていた。

生徒の出来が、想像以上によすぎるのだ。自分よりも、もしかしたら頭がいいかもしれない。そんな不安が、洋輔によぎった。高校生より頭が悪いと示しがつかない。そう危惧した洋輔は、閉館時間のギリギリまで、宝徳学園の図書室で勉強しようと考えたのだ。

その最中に、遠くから肉の潰れたような音がしたのだ。集中力は途切れ、同時に洋輔の好奇心を駆り立てた。

宝徳学園の敷地面積は広大なため、まだどこに何があるのか把握できておらず、図書室を出てから洋輔は早速迷った。自分がどこを歩いてきたかさえ、記憶が曖昧だった。

とりあえず、出てきたからにはあの音の正体を突き止めなければならぬ。そんな使命感にも似た思いを抱きつつ進んでいると、窓の向こうに人ばかりが見えた。

「なんだ？」

目を凝らして、人ばかりをしてみる。

宝徳学園には三つの校舎がある。一二年の教室が主の、第一校舎。三年の教室と、進路のための資料室が設けられている第二校舎。図書室や保健室、食堂などがあるのは第三校舎で、この三つの校舎は縦に三列で並んでおり、二階の渡り廊下によって繋がれている。洋輔がいるのは、第三校舎の一階。人だかりがあるのは、第三校舎と第二校舎の間に位置する中庭である。

洋輔は足早に人だかりを目指した。

外へ出るための通用口を開き、今度は駆け足で人だかりのもとへ向かう。

数十人の生徒たちは、真ん中にあるものを取り囲むようにして集まっていた。

「なんだよ……これ」

動揺する声が、ちらほらと聞こえてきた。中には、嗚咽も聞こえてくる。洋輔の好奇心は、それに比例するようにますます高くなっていた。

洋輔は、生徒たちが取り囲んでいるものは何なのか覗こうと背伸びをしてみるが、如何せん身長には恵まれていなく、しかも前にいる男子生徒の身長がかなり高いため、何を取り囲んで動揺しているのか見えなかった。

「あ、先生」

一人の女生徒が洋輔の存在に気づき、振り返って声をかけてきた。その女生徒のことはよく覚えていた。今日の昼休み、声をかけてきた女の子だ。

宝徳学園は先ほども説明した通り都内屈指の進学校で、生徒たちはお互いをライバル視しており暗い子が多いのだが、声をかけてきた女子は他の生徒たちとは正反対の明るい子で、食堂でメニューを眺めていた洋輔に、気さくに声をかけてきたのだ。そのため、彼女のことは洋輔の記憶に強く残っていた。

そんな彼女が、今泣いているのだ。目は充血しており、今も頬に涙が伝っている。どうして泣いているのか、洋輔には皆目見当がつか

なかった。

心配になった洋輔は、生徒たちを強引に掻き分けて取り囲んでいたものを見た。

それを見た瞬間、絶句した。

洋輔の目の前には、血の池が出来ていた。内臓やら脳が飛び出ている物体が、そこにはあった。見る限り男子生徒のようだが、学ランがなければおそらく判別がつかなかっただろう。それほどに、凄惨な死体だった。これはいったいどういうことなのか。

状況をよく理解できず、洋輔は頭の中で瞬時に様々なことを思い浮かべた。

その中の一つに、投身自殺という四文字がよぎり頭上を見上げた。唯一、第三校舎には屋上がある。そこから、この男子生徒は飛び降りたというのか。

そう考えると、途端に眩暈が襲ってきて、膝をついた。洋輔に声をかけた女子は短い悲鳴を上げ、前にいる男子生徒は彼女の悲鳴に驚いてこちらを振り返った。

「先生、大丈夫？」

女生徒は、手に握り締めていた紙を丸めてポケットにしまうと、心配そうな声を上げて洋輔に駆け寄った。その声に若干の安心感を抱きつつも、やはり心の中にある不快感を払拭することは出来なかった。

図書室で聞いた肉の潰れる音の正体は、この男子生徒が飛び降りて地面に衝突した時の音だったのだ。

そう思うと背筋に悪寒が走り、吐き気がこみ上げてくる。洋輔が口に手を当てると、女生徒はそれを察して背中 hands を当て、さすり始めた。周りの生徒たちは、洋輔達に注目している。

「どうしてこんなことが……」

鼻息を荒くしながら、洋輔は心の底から振り絞るように言った。「おい、どうしたお前たち」

不意に、遠くから野太い声が飛んできた。生徒たちは、声の主を

振り返る。

近づいてきたのは、生徒たちから恐れられている体育担当の教師、山田哲郎だった。

この高校に通う生徒たちは勉強ばかりを必死に取り組み、運動部は一応存在するが所属している生徒は少ない。

つまり皆、体育が嫌いだ。

しかし山田は、体育の見学を相当な理由がないと認めなくて、生徒たちは嫌々体育の授業を受けている状況だ。生徒たちが嫌うのも無理はない。

そのゴリラみたいな顔と、身長百八十センチという大柄な体格がまた、生徒たちに別の恐怖を与えているといえる。

「何があつた、ええ？」

生徒たちは萎縮して、山田に何も話そうとはしない。

「あれ、瀬郷君。どうした？」

女生徒に背中をさすられている洋輔を見た山田は、一瞬にやついた表情を浮かべ、中腰になって訊いて来た。

「いえ……あの……」

洋輔も、上手く説明することが出来ないので、代わりに男子生徒の自殺死体を指差した。怪訝そうな表情を浮かべつつも、山田は指さされたほうに顔を向けた。

男子生徒の自殺死体を見た瞬間に、みるみる山田の表情を青ざめていき、先ほどまでの威勢は感じられなくなった。

「あ……あ……」

口をパクパクさせ、山田も男子生徒の死体を指差していた。その光景は滑稽だったが、残念ながら洋輔もそれと同じような状態で、笑える立場ではなかった。

「と、とにかく、先生に知らせないと」

独り言のように呟くと、山田はどこかへ走っていった。職員室へと向かったのだろう。

「先生、とにかく保健室へ行こう」

女生徒に優しく声をかけられ、洋輔は情けない気持ちになりながらも、頷いた。今はとにかく休みたいのだ。
体を支えられながら、洋輔は保健室のある第三校舎へと戻った。

第二章

「先生つて、ついていないね」

保健室に入ってから、棚に並べてある薬品を眺めていた女生徒は、
呟くようにいった。

「何が？」

気持ち悪いせいもあって、洋輔はぶっきらぼうに言った。

「だって、教育実習に来たのにこんな事件に出くわすんだもん」

女生徒の言葉には答えず、洋輔はしばらく辺りを見渡して、手近
にあった椅子を引き寄せ座った。

「確かにそうだな」

改めて女生徒の言葉を考えてみると、納得のいく部分があった。

洋輔は、一ヶ月とはいえ教師の体験をするために宝徳学園へ赴いたのだ。高校教師というのは、中学生の頃からずっと抱いていた将来の目標でもあった。昨晩は、楽しみと不安でほとんど寝付けなかったぐらいである。

待ちに待った教育実習の初日に、こんな事件に出くわすなんて誰が想像できただろうか。洋輔は狼狽を隠すことが出来なかった。

「あれ……自殺だよな」

女生徒は依然薬品を眺めながら、後ろに座っている洋輔に訊いてきた。女生徒の口調には、まるで自分に言い聞かせるかのような響きがあった。

彼女自身も分かっているはずだ。あれは飛び降り自殺のなにものでもないということを。分かっているが、誰かに問いたかった。洋輔には、そのように見えた。

女生徒の肩がかすかに震えているのに、洋輔は気づいた。そういえば、死体を見ていた彼女の目は赤かった。泣いていたのだ。

死体を見たから彼女は泣いたのか。女の子だから、それが普通の

反応なのかもしれない。実際、他の女生徒からも嗚咽が聞こえた。しかし洋輔は、はつきりと根拠があるわけではないが、女生徒が泣いたのは、死体を見た以外にも何か特別な理由があるような気がしていた。

洋輔が何か口を開こうとしたと矢先、奥の部屋から養護教諭の松平邦和姿を現した。その表情は、険しかった。

松平はオールバックにして髪を後ろにまとめており、山田に勝るとも劣らない体格をしていた。昔、いかにもスポーツマンだったという風格を漂わせている。洋輔は、松平と接するのに若干の抵抗を抱いていた。

「はい」

片手に持っていた物を、松平は洋輔に差し出した。それは、一粒の錠剤だった。

「吐き気が止まると思うから」

「けど、いいんですか。勝手に飲んじゃって」

他人から貰った薬を服用してはいけないと、何回か保健の先生に注意されたことがあるのを、洋輔は思い出す。

「大丈夫、大丈夫。市販だから、誰が使っても同じだよ」

宝徳学園には似つかないほど、松平の性格は楽観的であった。

「しかしまあ、驚いたね。生徒が自殺なんて」

松平がベッドに腰をかけた時、軋む音が保健室中に響いた。その音に洋輔は大げさに肩をびくつかせたが、薬品を眺めたままの女生徒は無反応だった。

「佳代ちゃん、詳しい話を聞かせてくれないか？」

と、松平は女生徒のほうへ顔を向けた。佳代と呼ばれた女生徒はようやくこちらへ振り向いた。佳代は、ぎこちない笑顔を浮かべていた。

「私、他の生徒たちのように中庭で勉強していたんです。そしたら突然、耳に不快な音が入ってきて、見たら人の死体があって……」

喋っていくうちに感情が高ぶってしまったのだろう、笑顔を崩し

彼女は両手で顔を覆った。松平は後悔した表情を作り、再び洋輔のほうへ顔を向けた。

佳代はとつくのとうに限界を迎えていた。さきほど薬品を眺めていたのも、気持ちを紛らわすためだったのだろ。そして振り返った時、彼女は笑顔を浮かべていたが、やはり無理やり取り繕ったものだった。こちらに悟られまいと、懸命に振舞っていたのだ。

そんな彼女を、洋輔は不覚にも愛おしく思ってしまった。その感情の正体が果たしてどのような類のものなのか、幸いにも洋輔はつかめていなかったが、気づくまで最早時間の問題だった。

「しかし、どうして自殺なんか……」

「君は、自殺と断定しているようだね」

「は？」

松平は意味深な表情を浮かべた。

「自殺ですめばいいんだけどね」

「どういことですか？」

洋輔が訊くと、松平は突然我に返った顔をして、やがて表情を和ませ言った。

「中年の、独り言だよ」

そんなこと言われても、洋輔には松平の言葉を独り言として聞き逃すことなんかできなかった。

自殺じゃなければなんなんだ　洋輔は、心の中で憤慨した。

「そつえば、君は今日来た実習生の一人だよね？」

「え、あ、はい」

唐突に話題を変えられ若干戸惑ったが、洋輔は頷いて言った。

「ついていないね、一目目だというのにこんな目にあつて」

不謹慎だが、洋輔は吹き出しそうになった。佳代と同じ事を言っていたからだった。

「死体を見て、気持ち悪くなったのか」

松平はじつと洋輔の目を見つめながら、訊いてきた。洋輔は見栄を張ることなく、黙って頷いた。

「そうか」

頷きながら、松平はゆつくりと洋輔の手のほうへ視線を移動させ、しまったという表情を浮かべた。

「ごめんね、忘れていた。水だよ。そうだよ、水だよ。水がなきゃ、薬飲めないよね」

言いながら立ち上がって、松平は奥の部屋へと姿を消した。

正直言つと、洋輔はこの薬を飲むのに躊躇いがあつた。市販といえども、他人から渡された薬はやはり飲む気にはなれなかつた。

「ねえ、先生」

不意に、佳代は声をかけてきた。昼休みの時に声をかけてきた彼女とは思えないほど、その姿は憔悴しきつていた。

その様子に、洋輔はかすかな違和感を抱いていた。

「私……どうしたらいいのかな？」

佳代が何を言っているのか、意味が分からず洋輔が顔をしかめていると、勢いよく保健室のドアが開いた。

ドアのほうへ振り向くと、そこには息を切らした男子生徒が立っていた。

「佳代！」

男子生徒は佳代の名前を叫び、堂々とした足取りで保健室へと入ってきた。

真ん中へ来た辺りで、男子生徒はようやく洋輔の存在に気づいたらしく、嫌悪感を露にしたが、それでも佳代のほうへと近づいて行った。

「何よ」

佳代は今にも泣き出しそうな顔をしている。声も震えていた。

「ここに入ったところを見て、来たんだ」

そう言つと、男子生徒は佳代の腕を掴み無理やり連れて行くことにした。

「ちょっと、何よ！」

佳代は激しく抵抗したが、男子生徒の力には太刀打ちすることが

出来なかった。

「俺と一緒に来るんだ!」

「離して!」

「ちよつと、君」

見かねた洋輔は、男子生徒のもとへ行き佳代から引き離れた。

「何すんだよ、おっさん」

「おっさん、つて」

俺はまだ二十一だぞ、という言葉が喉まで出掛かったが、ぐつと堪えて大人な対応を心がけた。

「彼女嫌がつているぞ」

「俺にはそう見えないね」

この自惚れている男子生徒を、思いつき罵ってやりたいという衝動を何とか抑え、無感情で洋輔は言った。

「君は彼女のなんなんだ?」

「どういう意味だよ、それ?」

男子生徒は食って掛かってきた。

「お前、佳代の彼氏気取りか?」

宝徳学園の生徒とは思えないほど、男子生徒の気性は荒く幼稚だ、洋輔はそう思った。相手にするだけ、時間の無駄かもしれない。

「俺はな、佳代の」

「赤の他人だよ、こいつ」

男子生徒の言葉を遮り、佳代は驚くほど冷たい声で答えた。

「な、何?」

「うっさい、本城」

変わらぬ冷たい口調で、佳代は本城と言う男子生徒に、突き放すように言った。

「本城つて……」

動揺を、本城は隠そうとしなかった。察するに、冷たくされたのが驚きだったのだろう。

洋輔は、本城と佳代の関係性がつかめなかった。

「なあ、お前」

「止めて！」

無理やり引き寄せようとする本城の手を、佳代は叫びながら振り払った。その時、ポケットから丸められた一枚の紙が落ちてきた。

「それ……」

本城が拾おうとすると、佳代は覆いかぶさるようにして紙を拾った。

紙を入っていたポケットにしまい、佳代は立ち上がって洋輔のほうへ顔を向けた。

「じゃあね、先生」

小さい声で言うと、目を伏せながら佳代は保健室を出て行った。本城は手を伸ばして佳代を止めようとしたが間に合わず、がっくりと肩を落とした。

「くそっ！」

悪態をついて、本城は洋輔のほうへ顔を向けた。

その表情は何か言いたげであったが、結局何も言わないで保健室を出て行った。その後姿は、どこか寂しげであった。

佳代と本城は付き合っていたのだろうか。しかし、佳代は本城に対して、理由は分からないが怒りを抱いていた。赤の他人だと、佳代は躊躇うことなく洋輔に言っていた。

解せないことはたくさんあるが、今は関係ないだろう、そう自分に言い聞かせ、洋輔は座っていた椅子のほうへ体を向けると、視界にコップを持っている松平の姿が映った。

「あ、先生。見ていたんですか？」

意味ありげな微笑を浮かべながら、松平は洋輔に近づいてくる。「邪魔しちゃ悪いと思ってね」

洋輔は、その言葉の意味を理解するのに時間はかからなかった。

「二人は付き合っているんですか？」

興味なさそうに素っ気なく訊いたが、内心では知りたくて仕方がなかった。

「いや、違うと思うよ」

松平の答え方も素っ気無かった。

「違うんですか？」

「多分ね」

思わず聞き返してしまった洋輔に、松平は訝しげな眼差しを向けた。

「いや、ほら、なんかそんな雰囲気があったから」

慌てる洋輔に、松平はにやけながらコップを差し出した。

「よかったな」

「何がですか？」

松平が何を思っただけよかったと言ったのか、本当は洋輔自身も分かっていたはずだ。けど、それを認めたくない自分がいた。

「佳代ちゃん、男友達いるからなあ」

聞き流そうとしたが、無理だった。

「さっきの彼、ええっと……そうだ、本城君とも仲いいし、それと誰だったかな、凄い頭のいい子……やっぱ思い出せないわ」

無理に思い出そうとして頭を悩ませている松平を尻目に、洋輔は佳代のことを思い浮かべため息をついた。所詮、自分と佳代は、教育実習生と生徒の関係なのだろうと。

「そつえば、君は佳代ちゃんと仲がいいのかい？」

「え？」

思わず声をあげてしまったのは、心の奥に秘めているものを松平に見透かされたからだと思っただからだ。

しかしすぐそれを打ち消し、松平の質問に答える。

「まあ、仲いいかは分からないですけど、彼女のほうから声をかけてきてくれて、少し話したんです」

「なるほどな」

どうやら、松平は納得の様子だった。

「この学園では珍しいくらい、明るい子だ」

松平の言つとおり、彼女の明るさはこの学園に似つかわしくなか

った。実際、洋輔は教育実習生として今日、この学園を訪れてから生徒たちが仲良くお喋りをしている風景を見ていない。皆、人と接することを嫌い勉強ばかりをしていた。正直、洋輔はうんざりしていた。せめて楽しく、教育実習をしたかったのだ。そう思っていた矢先に、彼女と出会った。洋輔は少し救われた気がした。

佳代に特別な感情を抱いていることは、言うまでもないだろう。だが、洋輔はそれを決して認めはしなかった。そんな不純な動機から、教師になったと思われたくないからだった。

「保健室にも、前は時折顔を見せてくれる程度だったが、最近はよく来てくれてね。私の話し相手になってくれてるんだよ」

頷きながら、洋輔は松平にかすかな嫉妬を感じていることに気づき、自分を叱咤した。

「けど、彼女の様子少し変じゃなかった？」

「変ですか？」

佳代の普段をあまり知らない洋輔に言われても、答えられるわけがなかった。まさか松平は、自分の気持ちを知ってわざとこのような質問をぶつけたのではないか、そのような疑いを洋輔は向けた。

私は、普段の彼女のことを知っているよ。

松平の目は、そう言っているような気がした。

「なんか、いつもと違うような」

やっぱりだ。洋輔は冷やややかな気持ちで松平を見つめた。

「けどさあ、普通人が死んだくらいであんな泣くかねえ」

「さあ」

洋輔は素っ気無く返し、さっさと薬を飲んでこの保健室を出て行くとした。

一錠の錠剤を口に含み、水でそれを無理やり体の中に流し込む。松平はその動作に目をくれず、なにやら腑に落ちない点をあげているようだった。

「なんであんなに泣くのかな。やっぱり死体を見ると、悲しいのか。彼女だったら、泣くのか。けど……」

コップをテーブルに置いて、保健室を出て行く準備を始めると、松平は声をかけてきた。

「ねえ、やっぱり佳代ちゃんに限らず、普通の女の子であればシヨツクで泣くのかな？」

佳代に限らずというのと、松平の目がいつそう真剣になったので、洋輔は少し答える気分になった。

「そう言われると、そうですね」

洋輔は、死体を見ていた時の生徒たちを、脳裏に思い浮かべていた。

死体を囲んでいた生徒たちは狼狽を浮かべていたが、涙を流している者はほとんどいなかった。女子は、何人か嗚咽を漏らしていたが、佳代みたいに号泣している者はいなかった。

あれが彼女だといわれればそれまでだが、普通に考えれば、誰か分からない死体を見ただけで目を赤くするほど泣く者はいない。

「私の、気にしすぎかもしれないけどね」

そう言って、松平は重くなった空気を和ますかのように笑いながら言った。つられて、洋輔も笑った。

けど、心中は穏やかじゃなかった。

松平のおかげで、佳代という女の子のことをもっと知りたくなっていた。

その中には好意というものもあるが、それだけじゃない。松平が口にした疑問が、洋輔の中でも引っかかっていた。

「薬、ありがとうございます」

ここで長く考えていても仕方がない。洋輔はお礼を言って、足早に保健室を出て行った。

見送ると、松平は静かになった保健室を見渡し、そして佳代たちが来る前までやっていた実験を再開するため、奥の部屋へと消えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8691z/>

受験戦争

2011年12月27日20時47分発行